

共立女子短大 ○三木幹子 綾田雅子 奈良女大生活環境 丹羽雅子

<目的> 布のドレープ性にはカーテンやフレアースカートのような広い面積のものから、衿や袖の一部分に使用される面積の小さい装飾的なドレープまで様々な種類があり、各々、用途に応じた評価法を検討する必要がある。そこで本研究は、装飾ドレープとして、緩やかな波形状のたるみを衿元にあしらったカウル・カラーに着目し、ドレープの形態ならびに美しさに及ぼす布の力学特性の影響を明らかにすることを目的とした。

<方法> 高ドレープ性能を備えた試料布15種類について、KES-FBシステムを用いて基本力学特性を測定した。これらの試料布を用いて、カウル・カラーのサンプルを前身頃中心の地の目がバイヤス方向になるように製作した。JIS婦人9号サイズの人台にサンプルを着装させ、視覚官能検査を行った。被験者は20代の女性15名とし、官能評価はシェッフェの対比較法を採用し、2サンプル間を5段階尺度で評価してもらった。多変量解析により、布の力学特性を変数として、カウル・カラーのドレープの視覚評価値の予測を試みた。

<結果> 曲げおよびせん断剛性が大きく、また曲げおよびせん断ヒステリシスの小さい試料は、官能値がマイナスに評価されており、反対にある程度剛く、弾性が大きすぎない試料の方がドレープが美しいと評価された。軟らかすぎるサンプルの場合、ひだを形成し難く、また形成したドレープのひだを維持する能力、すなわち形態安定性能に乏しいため高い評価が得られなかったと思われる。また、ドレープを支配するパラメータとして曲げ、せん断に関する複数の力学特性値を用いて重回帰分析を行った結果、視覚官能評価値の予測式を導くことができ、カウル・カラーに適した布の特性が明らかになった。